銅鐸の話・入門編

酒井龍一

第一章　銅鐸に関するとりあえずの紹介

謎の青銅器

銅鐸は「謎の青銅器」といわれる。だが、弥生時代（約二千年前）のものであること、稲の豊作を祈願する祭器と考えられること、多くが山野など人里離れた意外な場所で出土すること、近畿を中心とする広い範囲に分布することなどは、一般的にもよく知られている。博物館などで実物（精巧な模倣品の場合もある）を見た人も多いはず。更に関心ある人なら次のこともご存じであろう。

一、その祖形が「朝鮮式小銅鐸」とみられる。

二、袈裟襷や鋸歯紋など各種の紋様や、鹿など様々な絵画が描かれている。

三、一〇センチ以下の小形品から、一メートル以上の大形品まである。

四、一個や二個や、それ以上に多数まとまって発見される場合がある。

五、剣・鉾・戈・鏡などの青銅器類と共伴する例がある。

六、製作に使われた鋳型が発見されている。

考古学ブームの昨今、銅剣三五八本・銅矛一六本・銅鐸六個という驚異的な出土で有名な島根県斐川町の荒神谷遺跡、四〇個以上もの銅鐸を所蔵する辰馬考古資料館（兵庫県西宮市）、「銅鐸博物館」と呼ばれる野洲町立歴史民俗博物館（滋賀県）、黄金色に輝く巨大銅鐸（複製）が展示されている大阪府立弥生博物館（和泉市）など各所を訪問し、あなたは既に学習を深められているかもしれない。

先日、さる銅鐸講演会を聴きに行った人の話である。「銅鐸は本当に農耕祭器なのか？」と質問したところ、その考古学者は、「いや断定できない。なにしろ銅鐸は謎の青銅器である」と語気を強めた後、怪しげな笑みを浮かべ、「とにかく最近、銅鐸が面白くなってきた」

と言葉をつけ加えたという。

基本用語

専門家なら、常識だけでは許されない。先ず、鈕・舞・鰭・飾耳・型持穴・身・裾・内面突帯・舌等、銅鐸各部の名称は当然のこと、区画突線・軸突線・外周突線・菱環鈕・外縁付鈕・扁平鈕・突線鈕・内向き鋸歯紋・外向き鋸歯紋・袈裟襷紋・饕餮紋・邪視紋・最古・古・中・新段階・聞く銅鐸・見る銅鐸・近畿式・三遠式・兄弟鐸（姉妹鐸という用語はない）・朝鮮式小銅鐸・編鐘・地的祭儀・天的祭儀・結界・鉛同位体比等、様々な基本用語を熟知するのが前提。加えて、次のような用語も理解しているに違いない。

双頭渦紋S・Z

八c七x・六c四x・一〇c六x・四c一x流水紋

R・L鋸歯紋

一類型横帯特殊文・斜格子平帯縦横四区袈裟襷文・四類型縦横平帯四区画筒型袈裟襷文・縦横突線帯六区画袈裟襷文銅鐸

渦森・福田・種松山・有本・明石・高住・安仁・長者ヶ原型銅鐸

舞径と底径と身の高さ比が、四・六・八、四・六・九、四・六・一〇の銅鐸

これらを直ちに解説できる人は、間違いなく専門家である。冒頭で意味不明語や難解語を羅列すると早速、本書を読むことを断念する人がでるかもしれない。心配無用。私もそうだが、多忙や記憶力のなさを理由に、多様な専門用語を覚えない者も多い。専門用語を覚えないと、確かに論文は読みにくい。でも、銅鐸研究は可能である。そもそも、そうした専門用語を、当時の弥生人は知らなかったはずである。

銅鐸研究者

質問がある。今、銅鐸研究の専門家は何人いるか？　答えは「一〇人程度」。意外に少ない。先ず、彼らを簡単に紹介する。

第一人者は、銅鐸の「神様」＝佐原真（国立歴史民俗博物館）である。なぜそう呼ばれるかは後で紹介する。一九六〇年以来、鈕＝把手の形状による銅鐸の分類・編年体系を確立すると共に、銅鐸一般の常識はほとんど彼が創った（『日本の原始美術7　銅鐸』一九七九年）。しかし、最近は銅鐸研究を断念した様子。発言は極端に少なくなった。否、銅鐸研究の集大成を発表すべく、密かに企画中（講談社）である。次に銅鐸の「小神様」＝春成秀爾（同博物館）がいる。「銅鐸の埋納と分布の意味」（一九七八年）以来、「最古の銅鐸」（一九八五年）や「銅鐸のまつり」（一九八七年）や「九州の銅鐸」（一九八九年）など、様々な論文を嵐のように書きまくって大活躍。今や、佐原の後継者として確かな存在となった。最新作は「銅鐸の起源と年代」『論争と考古学』（一九九四年）。

忘れてならないのが、銅鐸の「重鎮」＝三木文雄（元東京国立博物

館)。『流水文銅鐸の研究』(一九七四年)や『銅鐸』(一九八三年)が代表作である。銅鐸の文様と全体のプロポーションによる分類は精緻を極めた。遺憾ながら、先程の「神様」=佐原が登場。華々しい交代劇を演じたことは記憶に新しい。このことは後で紹介する。

新進気鋭が三人いる。一九八〇年以降に活動を始めた、難波洋三(京都国立博物館)・井上洋一(東京国立博物館)・岩永省三(奈良国立文化財研究所)である。銅鐸研究の将来は有能な彼らのもの。難波は「畿内学派」、井上は「新東京学派」、岩永は「九州学派」の系譜をもつ。三人の共通点は、異常に鋭い観察眼。観察・記述は克明・微細。彼らの論文を読むには、実に骨が折れる。

銅鐸に囲まれ生活をする贅沢者がいる。宮川偵一(辰馬考古資料館)・新藤武(銅鐸博物館)・栗原雅也(静岡県細江町立姫街道歴史民俗資料館)である。東博の井上を含めた彼らの職場には、多くの銅鐸が保管されている。従って、銅鐸を友とし日々の対話が可能である。他に、『銅鐸の系譜』(一九九三年)の竹内尚武や『銅鐸の谷』(一九九四年)の大野勝美のように、研究成果を自費出版する独立独歩組も各地に潜在している。

先程、専門家は「一〇人程度」と答えたが、誤りを訂正する。正解は「一〇人以上」である。実際には、ここで紹介しなかった銅鐸研究者や関係者も数多い。彼らも本書の各所で登場していただく。御安心を願いたい。

発表者

私の手元に、銅鐸博物館(滋賀県野洲町)における研究会発表者の一覧がある。これにより、銅鐸研究者や関係者の一端を紹介しておこう。

第一回　一九八九、二、五　丸山竜平(滋賀県教育委員会)　滋賀県の銅鐸

第二回　一九八九、七、一六　進藤武(銅鐸博物館)　大岩山銅鐸の諸問題

第三回　一九八九、一一、一八　喜谷美宣(神戸市立博物館)　国宝桜ケ丘銅鐸について

第四回　一九九〇、二、一八　福田英人(大阪府教育委員会)・西村公助・成海桂子(八尾市文化財調査研究会)　八尾市跡部遺跡出土の銅鐸について

第五回　一九九〇、六、二四　難波洋三(京都国立博物館)　摂津と河内・大和の流水紋銅鐸

第六回　一九九〇、二三　栗原雅也(細江町教育委員会)　細江町の銅鐸について

第七回　一九九一、二、二四　山尾幸久(立命館大学)　魏志倭人伝から銅鐸の時代を考える

第八回　一九九一、六、二三　藤田三郎（田原本町教育委員会）　銅鐸を造った村―唐古・鍵遺跡

第九回　一九九一、九、二九　石黒立人（愛知県埋蔵文化財センター）　銅鐸を造った村―朝日遺跡―

第一〇回　一九九二、二、一六　奥井哲秀（茨木市立文化財博物館）　銅鐸を造った村―東奈良遺跡―

第一一回　一九九二、六、二一　水野正好（奈良大学）　小篠原銅鐸群の意義

第一二回　一九九二、九、一三　原口正三（甲子園短期大学）　銅鐸と集落

第一三回　一九九三、二、七　藤井利章（神戸女子大学）　西神出土の銅鐸鋳型について

第一四回　一九九三、六、二〇　久野雄一郎（三宝伸銅工業）　銅鐸はどうして造られたか

第一五回　一九九三、九、一二　進藤武（銅鐸博物館）　銅鐸基礎講座

第一六回　一九九三、一二、一九　田代克己（帝塚山短期大学）　銅鐸の製作について

第一七回　一九九四、二、六　酒井龍一（奈良大学）　銅鐸のまつり

研究マニュアル

研究方法にマニュアルはない。各自、好き勝手、自由にやればよい。というと、私を投げやりな性格と感じる方もあろう。それは正しいとしても、通例の作業を解説しておく。

先ず、手引となる文献（次節で紹介）を参照。銅鐸の出土地・保管者・出土状況などの一覧表を作成する。それを手に各地を訪問すべし。可能な限り多くの銅鐸と出土場所を実見するが良し。銅鐸展も各所で開催。一挙に対面するチャンスである。一九九三年、神戸市立博物館で、無数の銅鐸（一〇〇個程度か）が展示された。多過ぎたゆえ精神が集中せず、観察不能。観察は一個づつすべし。ガラス越しの見学では、情報収集に限界がある。それに、銅鐸の裏面・内面・鈕の断面が見えない。また、展示物がレプリカのことも多い。

実物を手にとって、観察・実測・撮影・拓本することは簡単でない。いわずもがな、所有・保管者の許可が必要である。銅鐸は、一個＝数千万円以上の骨董的価値がある。落としてこわそうものなら。家宝を、拓本で真っ黒にしないように。銅鐸が振り鳴らされたことを確認するには、ひっくり返して内側突帯を観察せよ。これは先学の教えである。仮に、突帯が振り子（舌）と接触し摩滅しておれば、鳴らされていた証拠となる。

出土地を訪問すると通例、団地や工場などに変貌。既に原地は消失。

茫然自失で帰路につくことも多かろう。それに関係者も案外、正確な出土地点を指摘できないもの。銅鐸の出土状況を実見できる機会は、宝クジに当たる程度に少ない。新聞報道や噂話に注意し、直ちに出動する俊敏さが不可欠。油断大敵、機会を失うことも度々である。

無理を承知で、約四三〇個（これまでの出土総数。春成秀爾の捜査による）の特徴と、出土状況の把握に努めよ。製作地の特定・製作過程の復元・銅鐸の編年・絵画の解読・紋様の分析・同笵鐸の特定・成分分析・使用痕の観察・分布図の作成など、様々な作業もある。自由に銅鐸の謎を究明すればよい。人々に感銘を与える仮説ができれば幸いである。

学史研究

学史研究は重要である。神田孝平・沼田頼輔・鳥居龍蔵・喜田貞吉・高橋健自・森本六爾・浜田耕作・後藤守一・梅原末治・小林行雄・藤森栄一・直良信夫・三木文雄ら歴代の研究者に加え、佐原真と春成秀爾といった神様、新進気鋭の難波洋三・宮川禎一・井上洋一・岩永省三・進藤武・栗原雅也らの、人格・能力・業績・論文・言動・学派・出身地・趣味・特技なども熟知しておくことが大事。それに、三品彰英・田中琢・金関恕・水野正好・馬淵久夫・久野雄一郎らは、銅鐸専門家でないが、近年の銅鐸論議に必ず登場する重要人物である。彼らの言動も注意すべし。

手引書

数冊の手引書を推薦する。しかるべき概説書に、佐原真『日本の原始美術七　銅鐸』（一九七九年　講談社）ある。神様＝佐原が精根込めて世に送り出した労作。問題あるはずはない。これ一冊で銅鐸の何たるやを理解できる。私の座右の書でもある。

次いで、佐原真・春成秀爾著「銅鐸出土地名表」（『月刊考古学ジャーナル　二一〇』一九八二年　ニュー・サイエンス社）がある。全銅鐸#四五一個（一覧表を正確に勘定したわけでない）と鋳型二四個に関する基本データ（出土地・出土年・型式・紋様・高さ・所蔵保管者・文献・備考）を集成している。図面・写真はない。原本入手は困難だが、頁数が少ないのでコピーで可。ただし、一九八二年以降にも新たな銅鐸と鋳型が続出。新データ増補が必要となる。出土地点の地図は、報告書などを参照し各自で用意されたし。

銅鐸研究には、梅原末治『銅鐸の研究』（一九二七年　大岡山書店）も不可欠。約一五〇個（これも正確に数えたわけではない）の銅鐸に関する詳細な情報を収録。増補判（一九八五年　木耳社）の刊行に携わった佐原をして、「実は、出版後半世紀以上を経、銅鐸の出土総数が二・四倍（筆者註＝佐原の性格から判断して、正確に勘定したはずである）に達した現在といえども、この書物さえあれば、銅鐸の大要をつかむことがいまもって可能だという事実である」と言わしめた大

著。入手の仕方は、第二章の冒頭で紹介する。

歴史的な関係文献の目録には、田中巽著『銅鐸関係資料集成』（一九八六年）がある。大作なのでコピーは不可能。古本屋を巡ると、六割程度の値段で入手可能である。『西大寺資財流記帳』（西暦七八〇年）以降～大正時代の銅鐸に関する歴史史料も紹介され、学史尊重者には有効である。先に名をあげた歴代の研究者は、斎藤忠著『日本考古学史辞典』（一九八四年）や同『考古学史の人びと』（一九八四年）などでかなり掌握できる。

銅鐸の近況

かつて銅鐸は、どこかで誰かが偶然に発見するものと相場が決まっていた。洪水・造成・建築・畑仕事などが発見の主な原因であった。山遊びの少年や、散歩中の犬が見つけたこともあった。骨董屋や寺や海や川中で発見されることもあった。なぜか花嫁が持参した銅鐸もあった。花生けにして、旧家の軒先に吊り下げてあった銅鐸もあった。今は所在が不明だが、古文書に描かれている銅鐸も多い（山中一郎の指摘によると、古文書に掲載されている銅鐸は、なぜか大形品ばかりであるという。「律令制下の銅鐸の発見」『文化財学論集』一九九四年）。いずれにしても、考古学者が意図的に銅鐸の発掘を試みたことはなかった。それなのにである。状況は急変した。

今では、銅鐸のほとんどが、考古学者による遺跡の発掘で出土する。それも各地で。奈良県桜井市の大福（一九八五年）、大阪府八尾市の跡部（一九八九年）、兵庫県神戸市の本山（一九八九年）、徳島県徳島市の名東（一九八七年）および矢野（一九九四年）、島根県斐川町の荒神谷（一九八五年）、愛知県清洲町の朝日（一九八九年）。岡山県岡山市の高塚（一九八九年）、静岡県浜松市の前原（一九八七年）、福岡県嘉穂町の原田（一九八六年）など。まだまだある。小銅鐸や銅鐸形土製品も、発掘で続々と出土している。

同様に、製作に使われた鋳型も負けじと出土。兵庫県姫路市名古山（一九五九年）を筆頭に、奈良県田原本町唐古（一九七七年）・大阪府茨木市東奈良（一九七三年）・同東大阪市鬼虎川（一九八一年）・京都府鶏冠井遺跡（一九八二年）など。まだある。かつて、銅鐸と無縁だった九州からも鋳型が出土中。佐賀県鳥栖市安永田（一九七九年）。福岡県春日市岡本四丁目（一九七九年）や大谷（一九七八年）・同県福岡市赤穂ノ浦遺跡（一九八二年）など。まだある。

不思議なことに、謎の銅鐸自身が考古学者に接近し始めた。情勢は「好転」した。放っておく手はない。悪夢のバブルがはじけ不況の今日、銅鐸などにうつつをぬかしてとの批判も覚悟。だが、世間にうといのが考古学者、寛大な心で御容赦を願いたい。

幸せな考古学者

発掘現場で銅鐸に遭遇する考古学者が急増中である。彼らは「幸せ

者」と定義できる。実は、私もささやかな幸せ者である。

一九七五年のこと、今は大阪府立弥生博物館が所在する池上遺跡で、土器洗い中に「銅鐸片」を発見した。大したことはないようで、大したことである。佐原の指導により、これを携え、東京国立博物館の銅鐸保管部屋で多くの銅鐸と対面。その破片の紋様と、収蔵完形品の紋様を大きさの点で比較し、本来の器高を推定できた。これが私の銅鐸研究の第一歩（二歩目は踏み出していない）であった。既に池上で別の銅鐸片も出土（同年　大阪府教委）。次の転勤先の大阪府八尾市亀井遺跡でも銅鐸二片（一九七八・一九八一年）に遭遇。破壊された銅鐸も相当に多いと実感した。

嬉しさと反省

私は、本日（一九九四年二月六日）、滋賀県野洲町の銅鐸博物館で「銅鐸のまつり」と題する講演をしてきたばかりである。この博物館には、年三回、「銅鐸研究者」や「銅鐸関係者」が招かれる。一九八九年二月の第一回以来、既に一六回（発表者一覧は前出）を数えるという。銅鐸博物館によって、私も一七番目に認知された次第である。嬉しさのあまり、同館を「銅鐸研究の拠点」にすべきとか、全研究者・全関係者を結集し「銅鐸学会」を創るべきとか、全銅鐸のレプリカを展示すべきだとか、全実測図を収集すべきだとか、他人事だと思って、学芸員氏に様々な無理を強要した。その晩、麦酒を片手にではあるが、傲慢な態度を反省。償いの証に急遽、この『銅鐸の話』を書き始めた次第である。

空論

ご存じのように、私は真の銅鐸研究者ではない。佐原真は真の研究者である。この駄洒落は誰かのもの。捜査を重ねていたら、三日後に発見。佐原自らの創作であった。

「もっとも、私の名前は真なので、私のかかげる説は、つねに真説である」

（佐原真「重いカバンと定住起源論」一九九二年）

本書『銅鐸の話』は、真説より「空論」が多い。確かに私は、「銅鐸・その内なる世界」（『摂河泉文化資料　第一〇号』一九七八年）と「銅鐸（邪気と封じ込めのオブジェ）論」（『同　第二一号』一九八〇年）で、意味不明の理屈をこねたことはある。「銅鐸研究への提言」（『考古学ジャーナル　№二一〇』一九八〇年）をしたこともある。ある講演会の直前、モーツアルトを聴きながら、「一時間の銅鐸論」（『考古学論集　四』一九九二年）を書いたこともある。銅鐸博物館で講演もさせていただいた。定説たる「銅鐸・農耕祭器説」を疑う発言もしている。

だがすべて空論。銅鐸を克明に観察した経験はない。ちなみに「空論」とは、「役に立たない議論、よりどころのない議論」のこと（各種辞書参照）。研究戦略に二つの選択がある。観察可能な銅鐸を観察し、謎を解くか（Aコース）、観察不可能な弥生社会と対話し、銅鐸の理解に努めるか（Bコース）。かの哲学者＝メルロ・ポンティいわく。世間には「見えるものと見えないもの」がある。かの美術批評家＝ルネ・ユイグいわく。「見えるものとの対話」が必要だと。かの美術史家＝ハーバード・リードいわく。「見えざるものの形」を認識すべきだ。賢者たちは偉い。「通論考古学」では、銅鐸を克明に観察すべき。「異論考古学」では、銅鐸を見ずしてその謎を説くべし、である。

若き頃、私は弥生研究を志すと同時に、銅鐸研究もと決心した。以来二五年、遺憾ながらまだウォーミングアップ状態にある。そうした私が、本書で銅鐸の考古学を皆様に勧めようとしている。まことに失礼な話である。

無

実は、私が究明したいのは、銅鐸内部に封じ込まれている「何か」である。もちろん、通例の人には、その存在は見えるものではない。私が、勝手に実感しているだけである。ただし、何か「内なるモノ」を実際に封じ込めている紋様は、誰にでも見える。となると、先ず銅鐸外部の紋様を観察する作業が肝心ということになる。それとても、皮靴の外から足を掻くようなもの。その話はずっと後に廻す。とにかく、先ず考古学者の話をしておこう。私は、『考古学者の考古学』（財大阪文化財センター　一九九〇年）者なのだから。

第二章　銅鐸と考古学者の因果関係に関する有名・無名なエピソード

古本屋店と権威と若人と山砂の関係

さすがに謎の銅鐸と、浮き世ばなれした考古学者の関係。様々なエピソードがある。冒頭で有名・無名、有意味・無意味な話を紹介し、銅鐸研究の面白さを予感していただく。

「銅鐸の権威」とは、言うまでもなく、大著『銅鐸の研究』（一九二七年）を書いた梅原末治・元京都大学教授のこと。初心者はこの本から出発する。大阪難波の古書店（プランタン横）で原本が七万円、奈良西大寺の古本屋（駅前路地奥）で佐原真による補訂版が四万円。私は、『銅鐸の話』を執筆を開始するのに、どちらを購入すべきか大いに困惑。学史尊重の点からは前者。佐原を尊敬し財布が軽い私は、熟考の末、後者を購入した（一九九四年三月三一日）。水野正好・奈良大学学長が、難波で増補版＝四万円を発見。銅鐸研究を宣言した私のゼミ学生＝高梨政大君がそれを買った（マージャンで勝って、支払っ

たとのこと)。残るは天王寺のビアーホール前の古書店の一冊(四万八千円)。あなたはどこで発見するか。東京・神田の実情は知らない。この話は余計なことである。

権威・梅原は安易な解釈を排し、「物それ自体に語らしめること」を座右の銘とし、基礎資料の収集に全精力を傾けた。そして、一九六四年の兵庫県神戸市桜ヶ丘の銅鐸大量出土現場を見とって(有名なエピソードは省略)後、一九八三年に彼の生涯を閉じた。

一九六二年七月二三日。滋賀県教育委員会に、野洲町小篠原大岩山腹で多数の銅鐸出土したとの急報が入った(実際に出土したのは二〇日のようである)。新任の若き文化財技師・水野は早速、その東海道新幹線建設用の土取り現場に急行、必死に関係者からの事情聴取に努めた。その結果、明治一四年(一八八一年)の銅鐸一四個という大量出土地(A地点)から約四〇メートルの所(B地点)で、九個が三個ずつの入れ子状態で、別の一個はそこから約五〇メートル離れて出土(C地点)したようだ。その一〇個(滋賀県所蔵)は現在、当地の銅鐸博物館に展示中(精巧な複製か。私が見ても本物かどうかわからない)。それらは、博物館等でみる通例の銅鐸とは異なり、全体が山砂で黄色く汚れている。なぜか全く洗った気配がない。

話を戻す。同日、銅鐸の権威・梅原も、発見の一報で嵐のごとく現地に急行、直ちに観察すべく銅鐸を洗い始めた。当然といえば当然のこと。何を思ったか、血気盛んなこの若人技師が頑としてこれを阻止。権威・梅原は激怒したという。結果として山砂のついたままの銅鐸一〇個が残こり、その付き具合が出土時の原状や入れ子状態を正確に物語る。後半は、水野学長などから聞いた話である。

仙人と神様と銅鐸と鋳型と不思議な親子関係

その水野が師と仰ぐ人がいる。関西で「瓦仙人」=藤沢一夫を知らぬ者はない。その人である。藤沢は、一九四一年の『摂河泉古瓦の研究』以来、如何なく鬼才ぶり発揮。古瓦研究の初心者は、この本から出発する。彼はあらゆる古瓦の特徴を記憶、出土瓦を見て直ちに寺名を検索できる。いつしか彼は「瓦仙人」と呼ばれるようになった。

これも有名な話を紹介する。一九七三年一一月六日、大阪府茨木市の弥生集落・東奈良遺跡で発掘が始まった。八日後に鋳型片が出土。「銅鐸鋳造センター発見!」と、考古学界はパニック。佐原真(当時、奈良国立文化財研究所)が登場。鋳型を一見。紋様等の共通点から、直ちに兵庫県豊中市桜塚原田神社鐸と香川県善通寺市我拝師山鐸を鋳造したものと指摘した。その後も続々と鋳型が出土。すべての銅鐸の特徴を記憶し、鋳型を見て次々と瞬時に検索する佐原のマジカルパワーに一同は唖然とした。この時から佐原は「神様」になった。紹介すべきは、神様の話でなく、これまた有名な「親子神話」である。

戦後の一九四八年、藤沢一夫は大阪府東大阪市の古道具屋に立ち寄った。ここで、原田神社境内出土(一七八一年)の箱書きをもつ流水紋

銅鐸と遭遇。早速、原田神社に掛け合いそれを購入させた。二万五千円。その頃、息子・真依（古瓦に書かれていた人名に由来する）が生まれ、やがて父と同様、大阪府教委の頑固だが有能な考古学者になった。ある時、東奈良遺跡の調査が計画され、四天王寺大学教授となっていた父・一夫は理事として指導、息子・真依は調査員として発掘に従事した。そして先述の鋳型が出土。何とそれは、父が古道具屋で遭遇した銅鐸を鋳造したものだったという。これも、当事者から聞いた話である。

本日、平成六年四月一日。大阪市立博物館（大阪城内）で「特別展金属の考古学」が開催中。私も気分転換のため、そそくさと見学に出発した。幸運にも、原田神社の銅鐸とその鋳型が一緒に展示されていた。如何ながら、そこには有名な「親子神話」の解説はなかった。不幸にも館内の銅鐸群前に、なぜか酩酊した考古学者たちが集合していた。大阪城公園で考古学者の花見大会（大阪文化財センター主催）があったとのことである。

師弟と学恩

有名でないが、心暖まる話をする。水野に、別の恩師・鳥越憲三郎（元大阪教育大学教授）がいる。私も鳥越団長の下、兵庫県池田市の池田城跡（中世）の発掘に参加したことがある。城中心部で「カンザシ」を発見。大奥に違いないと、団長は直ちに祝杯用の酒を差し入れた。この話は無関係である。鳥越は、沖縄の古歌謡・「おもろ草子」の研究で有名である。耶馬台国の研究にも積極的に取り組み、熱心のあまり「奈良県大和郡山市矢田説」を提唱した。そこには、彼が論拠とする、物部氏の祖神を祀る矢田坐久志玉比古神社がある。その場所は、斑鳩の里・法隆寺からほど近い矢田丘陵の谷間。何と、わが家のすぐ前である。従って地元・大和郡山市では毎年、意味もなく「卑弥呼祭」が開催される。この話も無関係である。

鳥越も、銅鐸に関してはなかなかの幸せ者である。一九六六年、大阪府箕面市如意谷を散歩中の市民と犬が銅鐸を発見。通報を受け、瓦仙人＝藤沢らと共に発掘にあたった。一九七六年、鳥越団長は、兵庫県豊中市近辺に幻の「猪名（いな）の王国」を発見すべく利倉遺跡を発掘。「王国発見」の代わりに、水路（古墳時代初頭）内に設けられた木組中で銅鐸片を発見した。「突線鈕三式」に分類される新式銅鐸の飾り耳であった。

既に十個の銅鐸に遭遇し、また出世（当時、文化庁文化財調査官）していた水野は、恩師の学恩に報いるべく全国の銅鐸片を資料集成。銅鐸片の歴史的意義を検討する論文（「もう一つの銅鐸観」『日本歴史三六七号』一九七八年）を書き、次のような心暖まる言葉で稿を閉じた。

「その形はみにくく、しかも極めて小さい細片ではあるが、そ

の語るところは決して陽の目を見ている美しい銅鐸にくらべて見劣りするものではないと思えるのである」。

二組の兄弟

二組の心暖まる兄弟愛を紹介する。三重県在住の岡田登は、神学研究の殿堂・皇學館大学資料編纂所の考古学者である。彼と私とは度々、各地の懇親会でのみ遭遇する関係（いわゆる「懇親会派」。拙書『考古学者の考古学』参照）にある。一九七七年のある日、彼の兄・岡田正秋が、土取工事後の三重県鈴鹿市東ノ岡遺跡で、偶然に銅鐸片を発見した。「菱環鈕二式」という古式銅鐸の身端部分であった。弟は一三年をかけその歴史的意義を検討、優れた論文（「三重県鈴鹿市高岡山遺跡群発見の銅鐸片」一九九〇年）を書き、晴れて銅鐸研究者の仲間入りをはたした。兄あっての弟である。

奇遇にも同じ一九七七年。橿原考古学研究所研究員・久野邦雄は、奈良県田原本町の有名な弥生集落・唐古遺跡を発掘。未知であった銅鐸の土製鋳型を発見した。彼の兄・久野雄一郎は三宝伸銅工業（株）の社長、かつ金属研究の専門家である。兄は弟による大発見を契機に、銅鐸の製作技法の再現や成分分析等に積極的に取り組み、次々と論文（「伝羽曳野山出土（旧狭山藩旧蔵）銅鐸の金属学的調査報告」一九七九年　「西浦銅鐸　金属学的分析」一九七九年）を発表。今や弟を凌ぐ銅鐸研究者となった。弟あっての兄である。

一一七倍も幸せな学友

恐縮だが、個人的な話をさせていただく。私が子供の頃、故郷の丹波篠山で牛乳配達をしていた。毎朝、同じ場所で行き交う別の配達少年がいた。名前は池田正男。私の母の実家は彼の家の前にある。彼と私は、同じ中学の野球部で汗を流し、同じ高校の電気科で学び、また二人で郷土研究部を創り遺跡をかけ巡った。その後の道は異なった。彼は青雲の志を抱き上京、杉原荘介や大塚初重等が指導する明治大学で正統な考古学を学び、しかるべくして考古学者（兵庫県教育委員会）になった。若気の至り、血迷った私は、さる外国語大学に入学、卒業後は巷を徘徊し、気ままに考古学を楽しみ、気がつけばアリゾナやアラスカやフィリピンやシリアを徘徊する奇妙な「弥生研究者」になっていた。

私が、大阪府和泉市の池上遺跡で銅鐸「一片」に遭遇し、小さな幸せ者になったのが一九七五年のこと。同じ頃、池田は通報を受けて兵庫県日高町の久田谷遺跡に急行、水田の圃場整備中に出土した一挙「一一七片」の銅鐸に遭遇していた（池田正男「但馬郡日高町久田谷出土の銅鐸」一九七八年）。嬉しいことに、彼は私より「一一七倍の幸せ者」になっていた。

萩原学兄

無名の話をもう一つ。三〇年程前の高校生の時、私は二回だけ故郷・丹波篠山を出て、遺跡の発掘を見学したことがある。兵庫県播磨町の大中遺跡と同県尼崎市の田能遺跡であった。いずれも直前に、「邪馬台国・大発見！」の新聞記事が踊っていた。後で知ったのだが、二遺跡とも調査員としてあの萩原儀征がいた。後日、偶然にも、私は彼の手下として大阪府和泉市の池上遺跡（大阪府立弥生博物館がある）で数年間もプレハブ共同生活をし、後に私自身も大中遺跡の発掘を担当（播磨町立資料館の床下）をすることになる。

一九八五年のある日、水野正好教授と私が、高知県南国市の弥生集落・田村遺跡の見学に出張中の夜のこと。旅館に突然の電話がかかってきた。主は、奈良県桜井市教育委員会の萩原兄。どこでわれわれの居場所を捜査したのかは知らない。内容は、「今、大福遺跡で銅鐸を発掘中だから、見学にすぐ帰ってこい」とのこと。気が短く頑固者だが、実に親切な人である。弥生集落を調査中に銅鐸出土とは前代未聞（これ以降、度々出土することになる）。急遽、二人が必死で現地に到着したのは翌日、既に夕闇時近くであった。

照明灯の下には、常と違って真剣な表情の萩原と、常のごとく楽観的な面持の石野博信（当時、奈良県立橿原考古学研究所）の二人。夜を撤して銅鐸を発掘中の姿があった。既に石野は、一九七二年、桜井市纒向遺跡で銅鐸片（飾り耳）に遭遇した幸せ者であった。大福の銅鐸は、方形周溝墓（弥生後期）の周溝中に埋め置かれたもの。銅鐸の出土状況を初めて実見し私の足も震えた。学兄とは実に有難いものである。

なを「銅鐸と出土状況」の複製が、桜井市立埋蔵文化財センターに展示されている。銅鐸の出土状態を確認したい方は、当センターへ足を運ばれたし。

奈良大学

若き日に一〇個の銅鐸に遭遇した水野は今は奈良大学の学長。たった銅鐸一片に遭遇した私も今は同大学の教員。不思議なことに、奈良大学の卒業生に銅鐸関係者が多い。

銅鐸世界の西端、銅剣三五八本・銅矛一六本・銅鐸六個という驚異的な青銅器で有名な島根県荒神谷遺跡の発掘担当者の一人は、卒業生の宍道年宏君。徳島県の弥生集落・名東遺跡で銅鐸を発掘をしたのは、同じく勝浦康守君。

対する銅鐸世界の東端。浜名湖北側の静岡県細江町は「銅鐸の谷」として有名。この付近一帯になぜか銅鐸が多く散在する。その町立資料館の学芸員で、銅鐸に遭遇しているのが栗原雅也君。「三遠式銅鐸」の生産センターとおぼしきが愛知県朝日遺跡群。縄文土器研究を志す野口哲也君たちが、ここで鋳型細片（？）を発見。

滋賀県野洲町の「銅鐸博物館」の学芸員に水野哲平君。兵庫県三田市の平方遺跡でミニサイズの鋳型を発掘したのは、兵庫県教委の篠宮正君と佐伯博光君（現大阪文化財センター）の卒業生と在学生コンビ。

北部九州で銅鐸製作の事実が確認されて久しい。佐賀県鳥栖市には、銅鐸を含む各種青銅器の生産センターがある。当地に卒業生・久山高史君が赴任。早速、本行遺跡で鋳型の新発見に関係した。更に、佐賀県・吉野ヶ里遺跡の発掘担当者には二人の卒業生・草野誠司・桑原幸則君がいる。彼らは、銅鐸には遭遇していないが、弥生前期末と覚しき銅矛鋳型を新発見、わが国における青銅器の鋳造が弥生前期に遡る可能性を強くした。

いい忘れていたことが一つある。わが奈良大学は、秋篠銅鐸と相楽銅鐸の出土地に挟まれて存在する。

無常の雨

一九八七年のある日、徳島県徳島市名東遺跡で銅鐸出土との一報が入った。発掘担当は先に紹介した卒業生の勝浦康守君（徳島市教育委員会）。またもや、方形周溝墓横に埋め置かれたものという。水野教授と私は急遽、夜も明けきらぬ早朝に家を出発、大阪港のフェリー乗り場に到着した。だが無常の雨。そこには「本日運休」のビラがあった。二人は茫然自失状態で帰途についた。卒業生と教員との間には、時にこうした「？」もある。高さ三九・三センチの扁平鈕式六区袈裟襷紋銅鐸。

無題

一九八七年のある日、静岡県の某氏から電話が入った。「発掘現場で銅鐸が出土しているからすぐ来るように」、とのこと。感謝、感謝である。「重要なことなので絶対に内密に」との警告も添えられた。よくあることである。心踊らせながら新幹線で直ちに急行。なぜか、そこには山のような一般市民に加え、関東から中部から関西から多数の研究者が見学に来ていた。石野博信や春成秀爾の顔もあった。高さ六七・三センチの三遠式銅鐸。浜松市都田町前原Ⅷ遺跡。

一九八九年のある日、さる研究会の講師に呼ばれ伊勢湾近辺に出張した。翌朝、埋蔵文化財センターに案内されると、偶然にも出土したばかりの銅鐸があった。早速、現場を見学。担当者が、方形周溝墓横の出土地点＝その痕跡が生々しい大地を指差してくれた。高さ四六・五センチの突線鈕式四区袈裟襷紋銅鐸。愛知県清洲町朝日遺跡。

一九八九年のある日、大阪府八尾市跡部遺跡から銅鐸出土中の情報を得た。私も発掘をしたことのある弥生集落・亀井遺跡のすぐ東側である。直ちに、「通称・神谷研究会（どこの研究会にも属さない自由人ばかりが集まっている不思議な会）」で現地見学を実施。地下二・五メートルで、矢板に囲まれて銅鐸を発掘中であった。高さ四六・六センチの扁平鈕式流水紋銅鐸。

一九八九年のある日、岡山県岡山市の高塚遺跡で発掘中に銅鐸が出土。情報を聞いてはいたが、油断をしている間に行き忘れた。

見えない論敵

佐原真が若きころ。銅鐸と弥生土器の流水紋の共通性から、最古の銅鐸＝「弥生前期末説」を提唱すべく、「銅鐸の鋳造」（一九六〇年）・「流水紋」（一九六三年）・「銅鐸型式分類の研究史」（一九六七年）など、多数の論文を発表し、銅鐸研究の流れを大きく変え始めた。各所から反論が沸き起こった。いわゆる「逆風現象」である。やがて神様になろうとする賢者に対してであった。「北部九州より畿内の方が青銅器生産が早いわけがない」、「わが国での青銅器生産は後期、遡っても中期後半である」、「紋様の研究では、青銅器の製作年代を決定できない」など、種々の理由であった。

一九八二年、京都府向日市の鶏冠井（かいで）遺跡で、中期初頭（第Ⅱ様式）の土器と共に銅鐸（最古段階か古段階）の鋳型が出土した。新資料発見の事実によって、最古の銅鐸＝前期末論争に決着がつくかにみえた。神様もそう確信した。話は予定どおりは進まないから実に面白い。

佐原（当時、奈良国立文化財研究所）の部下に、青銅器研究の新鋭・岩永省三がいた。佐原を尊敬する彼は、年代決定に関する全データを詳細に検討し、次のように結論した。「以上をまとめれば銅鐸の成立年代は、かなりの蓋然性で弥生時代中期中葉（九州）・畿内第Ⅲ様式期（筆者註　中期中頃）（畿内）まで遡ると言えるが、さらに中期前葉（九州）・畿内第Ⅱ様式期（筆者註　中期初頭）（畿内）とするには、現状では証拠が十分ではない」（「銅鐸年代決定論」一九八四年）。神様に対して、部下はクールであった。

一九八六年、福岡県嘉穂町の原田遺跡で、木棺墓横から横帯紋のあるミニ銅鐸が出土した。佐原とは無関係の担当者は、「時期は甕棺墓との切り合い関係から、弥生時代中期の前半を下限とし、鋳造は、さらに古くなる可能性を有する」（福島日出海「福岡県嘉穂郡嘉穂町原田遺跡出土の小銅鐸」一九八八年）と報告した。心暖まるこの見解によって、論争は決着したかにみえた。神様も再びそう確信した。国際情勢は変化したが、この論争だけは別。その直後の状況はどうなったか。

一九八九年、続出する新資料、新事実を総括すべく、期待をもって『季刊考古学（青銅器と弥生社会）　二七号』が刊行された。意外にも、執筆陣に佐原と春成の名前はなかった。北部九州の青銅器生産センター＝佐賀県鳥栖市の安永田遺跡を発掘し、多くの鋳型に遭遇しているのは藤瀬禎博（鳥栖市教育委員会）である。佐原に多くの教示を受け研究を進めていた彼は、「銅鐸については、現段階では弥生時代中期中葉以降に開始されたとするのがより妥当性をもっている」と結論。個人の意見はかくあるべきものである。今も神様の声を無視する

声が絶えない。神様の余生に、まだ「一仕事」が残されている。

論争

「自分で言うのもおかしいのですが、私はわりに人格円満な方でして、あまり人と争ったことはありません」（佐原真『考古学千夜一夜』一九九三年　八頁四－五行目）

通例、学問は活発を越えた次元の「論争」で進歩する。佐原真の論敵は三木文雄。否、三木の天敵が佐原と言うべきか。その一端を紹介する。

三木は、文様や全体のプロポーションを徹底的に分類、それを基盤に確固たる銅鐸観を確立していた。ある時、心優しき佐原真が挑発を開始した。「三木文雄氏の分類はその極地まで到達したといえる。しかしこの方針は徹底するほど矛盾を生じ、銅鐸を正しく年代順に配列することには成功していない」。三木はこの批判に対し、次のように弁明した。「筆者の類型分類は年代の配列を考えた上での型式分類ではなく、時を無視した銅鐸の種類別であり、かつその類型別にしても文様のみを基準にしたものではない」と。

佐原は果敢にも、鈕＝吊り手の形状変化による銅鐸の編年を試みた。三木はすかさず逆襲する。「果して鈕に依る銅鐸の型式分類が、銅鐸を正しく編年づけ得るか疑問なきを得ない」と。佐原は、鈕の断面が厚く菱形をし、釣り下げるのに適したものが最も古いと主張。三木は、「鈕が厚く鰭の狭い銅鐸が最も古い銅鐸なのであろうか」と疑問を呈する。そして重ねて言う。「鈕がいたって薄いものが多いとはいえ横帯文銅鐸がもっとも古く」云々。邪視文銅鐸こそ最古だ。佐原はこれに疑問を呈する。どう考えても、邪視文銅鐸の鈕は著しく退化しており、最古のものではない（外縁付鈕一式）。後継者の春成秀爾は佐原を弁護する。邪視文銅鐸はもっと後（外縁付鈕二式）のものだ。

佐原は、朝鮮式小銅鐸が日本の銅鐸と近親関係があると強調。三木は、「わが銅鐸の祖形を半島出土の小銅鐸に求めづらいことはくりかえすまでもない」と反論。佐原は弥生土器と銅鐸の流水紋の検討から、最古の銅鐸が弥生時代前期末に遡ると力説。三木は、銅鐸の出現は弥生後半から後と力説。佐原は、最古の銅鐸は紀元前一世紀をかなり遡る年代に登場したと推定。三木は、その製作に使用されたであろう物差し（後漢尺や魏尺）の検討から、紀元前に遡ることは絶対にありえないと強調。・・・。

佐原。銅鐸内面の突帯は舌（振り子）が当たって鳴るためのものだ。三木。いや違う。鐸身を強固にするためのもの。佐原。突帯の表面が平坦なのは舌があたった証拠。三木。否、そんなことはない。自分の舌で舐めてみればわかる（『銅鐸』一九七三年　八九頁五－六行目）。かくした論争が積み重ねられ、本日を迎えている。

論争と地域性

論争は、「事実」に基づいて行なわれるか。それ以外によってか。三木は元・東京国立博物館。対する佐原は元・奈良国立文化財研究所。東京対奈良。論争に「地域性」が影響するという意見がある。次に九州対関西に関する見解を紹介する。

「以上みてきたように、銅鐸の起源・年代についての二つの意見の対立をみていきますと、九州起源論者は、地元の資料については研究者のいっていることを信頼し、非常に大事に扱います。しかし、関門海峡を一つ隔てた本州のことになると、軽く扱う。基本的に信用していない。なぜ九州の人々は信用できて、近畿の人は信用できないかということになると、これには確たる根拠はありません」（春成秀爾一九九四年「銅鐸の起源と年代」『論争と考古学』）

なお、佐原は京都→東京→奈良→千葉→?、春成は鹿児島→岡山→福岡→千葉→?、ちなみに私は、猪の丹波篠山→「ダイエー」発祥地の大阪千林→「くらわんか船」の枚方→「金魚」の奈良大和郡山→?を遍歴。力む必要はない。私のように、あまり信用できない「関西人」がいるのは「事実」である。

神様達と空論者

春成は佐原の「最古の銅鐸＝前期末」説を支持し、立証に情熱を傾けている（私は情熱を傾けてはいないが、その支持者である）。彼は、佐原に代わって論敵を一喝。「佐原氏の型式分類体系を十分に理解したうえで批判するという姿勢が欠如していることにある」云々（「最古の銅鐸」一九八四年）。

ところで、昨年まで、佐原は関西の奈良、春成は関東の千葉。両者は別個に存在していた。一九九三年四月、佐原は奈良国立文化財研究所から国立歴史民俗博物館へ転勤。つまり神様が小神様の所へ引っ越したことになる。反対に、小神様が神様の所へ引っ越すという選択もあったのではないだろうか。神様引っ越しの祝宴では、私もいささか活躍したらしい（佐原真「主賓が遅刻した祝会」『考古学千夜一夜』を参照）。

一九七八年のこと、私は「弥生中期社会の形成」と題する論文を書いた。畿内弥生社会の特質を指摘したものである。掲載誌の『歴史公論　三月号』が送られてきて仰天。自分の論文にでなく、春成秀爾「銅鐸の埋納と分布の意味」＝「実論・銅鐸結界祭器説」に対してであった。実は、既に私は自信をもって「銅鐸・その内なる世界」＝「空論・銅鐸結界祭器説」を提唱すべく『摂河泉文化資料　第一〇号』（一九七八年）に原稿を送っていた。『歴史公論』は同年三月、『文化

資料』は惜しくも同年四月の刊行。以来、私は春成を尊敬するようになった。それに、空論が実論に勝るはずがなかろう。

神と銅鐸

因果関係の有無は別にして、銅鐸出土地名に「神」の文字が付く場合がある。四三〇分の一七程度の話である

一、島根県斐川町神庭荒神谷
二、兵庫県神戸市桜ケ丘神岡
三、香川県坂出市明神原
四、徳島県上板町神宝山田
五、兵庫県夢前町神種
六、兵庫県三原町神代地頭方
七、兵庫県伊丹市神津町中村
八、大阪府岸和田市神於山
九、大阪府高槻市天神山（日神山）
一〇、和歌山県新宮市神倉山
一一、三重県津市神戸木ノ根
一二、三重県津市野田（神戸村）
一三、三重県津市水分神社裏山
一四、愛知県田原町神戸谷ノ口
一五、愛知県田原町西神戸堀山田
一六、愛知県春日井市神領町屋敷田
一七、静岡県三ケ日町釣荒神山

無関係

本日は一九九四年二月十二日。私たちは、大阪府高石市の図書館で「神谷研究会」を開いていた。講師はウェルナ・シュタインハウスさん。大阪大学考古学研究室で学んでいるドイツからの留学生。内容は「ドイツの古墳」。銅鐸とは無関係の話であった。

同日、我々とは無関係に、すぐ横の大阪府立弥生博物館（和泉市）で、佐原真・田中琢・金関恕等、銅鐸研究の重要人物たちが集合し、何かのシンポジュームを開いていた。この頃、すぐ近くの遺跡で、また一人の幸せ者が誕生していた。関西新空港関連の開発に伴う遺跡調査をしていた、（財）大阪府文化財協会の若き技師さんであった。堺市下田遺跡の発掘中、高さ二二センチの小形銅鐸を発見した。彼は直ちに、われわれの図書館前を素通りして、重要人物が集合する弥生博物館へ持参。私がその噂を聞いたのはその夜。研究会後の懇親会（大阪市鶴橋国際マーケット）の最中であった。（なお、昨年三月に卒業した私のゼミ学生の河田君は、幸運にも、発掘技師として、その下池田遺跡に勤務中）。

二月一五日の朝日新聞に記事がでた。「粘土パックで、原色銅鐸！」。

弥生時代の川跡近く、径四〇センチ・深さ三〇センチの円筒形の穴から出土したという。そして、「収穫などの祭祀の道具にしていたのを、今後はもう使わないと集落近くに埋めたのではないか」との公式見解が示された。それは、私の「空論・銅鐸結界祭器説」とも、春成秀爾の「実論・銅鐸結界祭器説」とも無関係の見解であった。